

氏名	森野 亜弓
学位の種類	修士 (看護学)
学位記番号	修士 第 173 号
学位授与年月日	平成26年3月10日
学位論文題目	脳梗塞患者の退院時の機能予後に対する発症 一来院時間の影響

論 文 内 容 要 旨

※整理番号	178	(ふりがな) 氏 名	もりの あゆみ 森野 亜弓
修士論文題目	脳梗塞患者の退院時の機能予後に対する発症 - 来院時間の影響		
<p>【目的】脳梗塞の急性期治療の質の向上に伴い、後遺症予防の取り組みとして早期受診の重要性が高まっているが、先行研究では機能予後を発症前の身体機能の維持の観点で評価しているものはほとんどない。そこで、本研究では脳梗塞患者の退院時の機能予後に対する発症 - 来院時間の影響を発症前のADLをふまえた機能維持の観点から明らかにすることを目的とした。</p> <p>【方法】滋賀県下の脳卒中診療基幹病院3施設に入院した脳卒中患者のうち、脳梗塞患者を解析対象とした。診療録閲覧により基本属性、発症時および来院時の状況、入院中の経過、退院時の状況等の情報を得た。急性期病棟の退院時(回復期病院への転院、リハビリ病棟への転棟を含む)のmodified Rankin Scale(mRS)が0~1点の者、もしくは発症前のmRSから低下を認めない者を「機能維持良好」と定義し、主要評価指標とした。重症度はNIHSSに基づき、0~4点を「軽症」、5点以上を「中~重症」とした。発症 - 来院時間が3時間未満を「早期群」、3時間以上を「遅延群」とし、遅延群を参照水準とした機能維持良好オッズ比(95%信頼区間)を交絡因子を調整した多変量ロジスティック回帰分析を用いて全体および重症度別に算出した。</p> <p>【結果】選択基準に該当した全脳卒中者は209名であり、研究説明の実施不可能者を除く160名中、144名から同意が得られた(同意取得率90.0%)。そのうち解析対象となった脳梗塞患者は97名であった。対象者の年齢(平均値±標準偏差)は71.0±12.5歳で、男性が約6割を占めた。発症-来院時間の中央値[四分位偏差]は、480[98-1120]分であり、3時間以上の遅延来院は59.8%であった。機能維持良好割合は全体で45.4%、発症 - 来院時間別では早期群で52.5%、遅延群で33.3%であり、統計学的な有意差は検出し得なかった(p=0.169)。重症度別では、中~重症例では早期群は遅延群と比べて機能維持良好割合が有意に高く(其々50.0%, 12.5%; p=0.018)、軽症例では発症 - 来院時間による相違は認めなかった(其々57.9%, 50.0%; p=0.567)。重症度等を調整した早期来院による機能維持良好オッズ比(95%信頼区間)は、3.92(1.31-11.76)であり(参照集団:遅延群)、早期来院が退院時の機能維持と正の関連を有することが示された。</p> <p>【考察】本研究により発症前ADLが自立していた者のみならず、発症前にすでに要介助状態であった者を含めた機能維持に対しても早期来院が有効であることが示唆され、高齢化がすすむ我が国における後遺症予防の有効な対策として早期来院の重要性をより一層強めるものとなった。今後、追跡調査により中長期的な機能予後についての検討が必要である。</p> <p>【総括】脳梗塞患者の退院時の機能維持良好者は45%と半数以上が何らかの機能低下をきたすこと、発症から3時間未満の早期受診が脳梗塞患者の身体機能の自立だけでなく、発症前の機能維持の改善のために重要であることが示唆された。</p>			

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。